

O unico encontro na vida

パラナヴァイ市立学校18校の訪問 1巡めを終えて



訪問日 1回目	10/31(月)	10/31(月)
	am	pm
学校名	IDA CAMPANO	EDITH EBINER
	イウダ・カンパーニ	エヂイテ・ビーネ
校長名	ホーゼマラ	※不在
帰国児童	0	0
教室・廊下等のゴミ	○	○
全日/2部	全日	変則2部
在籍人数	240名	200名 am:3~5年 pm:幼、1~2年
補習	○	○
作品交流	○	◎

▼2部制…10校 (児童総数 3,585名)

全日制… 8校 (児童総数 2,098名)

⇒カイキ校のみ、午後も教師が授業を行う本来の姿。他7校の
午後は、大学生等 (アルバイト) が児童を管理している。

国の教育政策として、全日制の学校を増やす計画があるようだ。
しかし、具体的なものが何も示されないので不安である。

- ・学校施設
- ・教職員数の不足問題
- ・教職員の服務
- ・教育課程の抜本的な改訂
- ・教職員の給与や勤務体系
- ・地域、保護者、児童生徒への周知など 【校長との対話より】

▼帰国児童数 (日本在住経験のある児童) …7名

児童作品を通しての交流も着々と

□ 多米小6年児童作品、テーマ「大切なもの」

ネウザ・ブラガ校の4年児童に、詩の翻訳文の朗読をしたところ、全員が聴き入り、朗読が終わると一瞬の間をおいて拍手が起きました。

ブラジルの多く子どもたちにとって、「家族」とは「愛情」そのものであるようです。そして、わたしたち大人が図り知ることのできない、とても大きな存在であると感じられるようになりました。

ある学校訪問時、校長先生から学区の実情等について説明を受けました。その休み時間、他校に比べて明らかに多くの子どもたちが、私たちに抱きついてきました。

ぼくの大切なもの、家族
 ぼくを育ててきてくれた
 ぼくを温かく見守ってくれた
 ぼくを一生けん命応援してくれた
 ぼくを何度かたすけてくれた
 ぼくをしつかりおこってくれた
 ぼくを気がすむまでなくさめてくれた
 ぼくを大切にしてくれている
 大切なもの、家族
 家族がいなきやぼくもいない
 一つでもかけていたら、今のぼくはいない
 だれよりも身近で大切な存在
 ぼくの一の宝もの
 いつもありがとう
 これからもよろしくね
 ぼくの大変な家族



した。子どもたち一人一人の頭を撫でたり、抱きあげたりすることしか私にはできませんでした。

子どもたちのパワー全開!! ~4年生41名とのふれあい~

ダッシア校ジュダ校長からの依頼を受けて授業を行うにあたり、「子どもたちのよいところを見つけて具体的にほめよう」というテーマを自分に課しました。そして、これまでの授業観察から、多様な運動を経験し、運動量を確保できるような内容を構成してみました。

- ①片手ずつ交互に前方に突き出す。片手は胸部につける。
- ②手と足の協応動作 ※2拍子と3拍子などリズム変化
- ③背中合わせの状態から立ち上がる。相手のひざ(足首)を、時間内に数多くタッチする。
- ④鬼ごっこ (増え鬼、氷鬼など) ⑤2人一組で、ボール投げ・捕球 ※いろいろな投げ方・捕り方
- ⑥ドッジボール (王様ドッジ、お助けドッジ)
- ⑦みんなの体育館をきれいにしようゲーム ※制限時間は1分間

子どもたちは一生懸命にごみや枝葉を拾いました。「拾った分だけ体育館がきれいになったね」

